

第 47 回目 主にあつて強くあれ (2)

はじめに

●前回からエペソ人の手紙の最後の大切な箇所に入りました。エペソ書を三つのキーワードでまとめたウォッチマン・ニーのことばを思い起こしましょう。

- (1) **座す** ・ ・ キリストにある私たちの地位がいかなるものか。
- (2) **歩む** ・ ・ この世における私たちの生活を、いかに私たちの地位にふさわしく歩むべきか。
- (3) **立つ** ・ ・ 私たちの地位と歩みを妨げようとする敵に対して、いかなる態度を取るべきか。

●パウロが 6 章 10 節で「終わりに言います。」というのは、これまで語られてきたことをしっかりと自分のものとして生きるために、もうひとつ大切なことがあるという意味です。その内実は、「キリストにあつて、常に、強められ続ける(現在形)」ことなのです。そのことを別の表現で「**立つ**」としているわけです。ちなみに、6 章 11 節以降には「悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために」(11 節)とか、「堅く立つことができるように」(13 節)とか、「しっかりと立ちなさい」(14 節)とあるように、三度も「立つ」ということばでたたみかけています。「強められる」ことと「立つ」ことは密接な関係にあるのです。

●そして不思議なことですが、「立つ」ことは、常に、「座す」ことと「歩む」ことが密接に関連し合っているということです。切り離して考えることが決してできない事柄です。私たちが悪魔の策略に対して立ち向かうことができるためには、堅く立つこと、しっかりと立つこと、そのためには神の武具を身につける必要があります。今回は、最初に取り上げている神の武具—「**真理という腰帯を締める**」ことについて考えてみたいと思います。

【新改訳改訂第 3 版】エペソ人への手紙 6 章 11～15 節

- 11 悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身につけなさい。
- 12 私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。
- 13 ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、いっさいを成し遂げて、堅く立つことができるように、神のすべての武具をとりなさい。
- 14 では、しっかりと立ちなさい。腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、
- 15 足には平和の福音の備えをはきなさい。

## 1. 神の武具としての「真理の腰帯」

●ちなみに、聖書で挙げられている最初の三つの武具は「**真理の帯**」「**正義の胸当て**」「**福音の靴**」です。この三つは武具というよりは戦いの身支度といえます。しかし、身支度も戦いの武具の一部と考えるべきです。

# אגרת שאול אל האפסים

●消防士たち (Fire Fighter)が火災の現場に向かうとき、必ずヘルメットをかぶり、特別なスーツを着、そしてブーツを履きます。Tシャツにショーツ、サンダル履きで燃え盛る火と闘うわけにはいきません。そんなことをすれば消火活動以前にやけどをしてしまいます。聖書も同様、サタンと戦うのには、まず身支度から始めるよう使徒パウロは教えています。

●その身支度の第一は「真理の帯」です。ここではローマの兵士の姿を思い浮かべるとよいでしょう。ローマの兵士は決して長い丈、長い袖の服を着ません。そんな服装では自由に動くことができませんし、身動きがとれなくなってしまうからです。短い丈、短い袖の服を着ます。しかもその上にベルトをしっかりと巻きつけて、それが乱れないようにします。帯、あるいはベルトは腰に巻きます。「腰」という漢字の左側の「月」という字は、「身体」を意味します。その右側の「要(よう)」とは「かなめ」とも読みます。つまり、「腰」とは、身体の要、からだの動きの中心的な部分です。腰が弱ければ、立つことも、動くことも、走ることもままなりません。スポーツ選手にとって「腰が弱い」ということは、致命傷です。



●悪魔と戦う私たちにとっても腰が弱いと戦うことができません。ですから、使徒パウロは、まず、「腰には真理の帯を締め」と言っているのです。「腰には真理の帯を締め」というのは、神の真理をすべての行動の原理、原則とするということです。

## 2. 悪魔の策略を知る

### (1) 戦うべき敵の呼称

●見えない敵を聖書は次のように呼んでいます。

- ①「サタン」(ヘブル語、旧約、新約、共に使われ、「敵対する者」の意)
- ②「悪魔」(新約聖書のみで使われる) その手下どもは、「悪霊」
- ③「偽りの父」(新約で1回のみ)
- ④「この世の神」(新約で2回のみ)

### (2) その策略

①エデンの園の中央にあった二つの木。神はエデンにあるどんな木の実をとって食べてもよいとされました。しかし、園の中央に置かれた二つの木のうちのひとつ、「善悪の知識の木」からは取ってはならないと言われました。その木から取って食べるそのとき、「あなたがたは、必ず、死ぬ」と言われたのです。

②そこに惑わしの天才的な存在、サタンが蛇に姿を変えてエバに近づきました(創世記3章)。サタンがしたこ

## אגרת שאול אל האפסים

とはなんでしょう。蛇はエバにこう言いました。「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」と。サタンの「疑問提示」です。

③エバの真理の脚色(訂正)・・・エバは蛇に「私たちは、園にある木の実を食べてよいのです。しかし、園の中央にある木の実について、神は、『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけなからだ。』と仰せになりました。」と、エバが神のことばに対してわずかにあやふやな答えをしたとき、

④サタンは、すかさず「あなたがたは決して死にません。」と言って神のことばを直に否定しました。そして、「あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」と言って偽りの知識を与えたのです。アダムとエバに「あなたがたが神になって善悪を決める」ことを勧めています。「あなたがたは、なぜ、善悪を神に決めてもらう必要があるのか。自分たちで善悪を決めれば良いではないか。神の支配から独立し、自由になりなさい。あなたがたがこの世界の神となれば良いのだ。」とそそのかしたのです。人間を持ち上げて神に逆らわせ、人間を神から引き離す、実に巧みな誘惑です。同じ誘惑は、今に至るまで続いています。人を神から引き離そうとする教えは、みな、「人間ほど素晴らしい者はない。人間がこの世界の支配者だ。」「人間ほど、あるいはあなたほど素晴らしい者はない。あなたがあなたの人生の主なのだ。」と、人間を高揚させ、高慢にするものばかりです。悪魔は自分が神になろうとしたのと同じ罪を人間に犯させ、人間を称賛しながら、実は人間を自分の支配の下に置いてきたのです。悪魔は高慢のゆえに神の敵です。高慢はすべての罪の根です。私たちはこの「高慢」の罪を警戒しなければなりません。

⑤なんと人間はサタンの惑わしによって、自分の意志で、食べてはならないと言われた「善悪の知識の木の実」を食べたのです。」ここに罪が成立しました。

⑥そして、罪の結果の本当の恐ろしさは、彼らがエデンの園から追放されただけでなく、「いのちの木」への道一つまり神との永遠の交わりの道一が完全に封鎖されてしまったのです。再び、神の子イエス・キリストによってこの「いのちへの道」の封鎖が解除されるまで・・・。

●サタンの働きを一言で要約するなら、「**キリストにある私たちを、神から引き離そうとすること**」だと言えます。そのための策略はきわめて狡猾。しばしば、私たちの目には良いと思われることを通して、気がつくと、最も大切なことが、骨抜きにされてしまっている・・・そんな策略に立ち向かうためにも、私たちは主にあって、強くされ続けていく必要があります。そのために取るべき最初の神の武具は、「真理の腰帯を締める」ことです。

### 3. 真理について語ったイエシュアのことば

●「真理とは何か」・・・そんな問いをした人が聖書の中に出ています。それはイエシュアを最終的に十字架刑につけることを了承したローマの総督ポンテオ・ピラトでした。彼自身は自分には責任がないと自分に言い聞か

## אגרת שאול אל האפסים

せていましたが・・・。彼はユダヤ人にいわば脅迫されて承諾してしまったのでした。そんなピラトの「真理とは何か」という問いに対して、イエシュアは何も答えませんでした。どうしてでしょう。その答えのヒントが、それまでイエシュアが真理について語ってきたことばの中にあります。いくつか、拾ってみたいと思います。

- (1)「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、・・・あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」(ヨハネの福音書 8:31~32)
- (2)「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」(同、14:6)
- (3)「わたしは真理のあかしをするために生まれ、このことのために世に来たのです。真理に属する者はみな、わたしの声に聞き従います。」(同、18:37~38)

●これらのことばはすべてヨハネの福音書からの引用です。

「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、・・・あなたがたは真理を知り」とあります。これはもともとイエシュアを信じたユダヤ人たちに向かって語られたことばです。大勢のユダヤ人がイエシュアを信じたのですが、その人々に向って、「もし、あなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、・・・あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」と言ったのです。「とどまる」とは、「心に入る、心の中に根を張る」という意味です。逆の言い方をするならば、あなたがたは、私を信じたけれども、そのようなかわりをもたなければ、あなたがたは真理を知ることができないし、自由にされることもない。しかし、とどまればつまり、心にイエシュアのことばが根を張るならば、真理を知るだけでなく、真理はあなたがたを本当に自由にするという意味なのです。

●ピラトはそんなかわりを求めようとする意志は毛頭なかったので、「真理とはなにか」と尋ねても、それを知ることができないのは当然のことでした。真理はイエシュアご自身です。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」、「わたしは真理のあかしをするために生まれ、このことのために世に来たのです。真理に属する者はみな、わたしの声に聞き従います。」

●真理がイエシュアにあることは、使徒パウロもはっきりとエペソ人への手紙の中に書いています。

「まさしく、真理はイエスにあるのです」(エペソ 4:21)

「(イエシュアの教えとは)、・・・あなたがたが心の霊において新しくされ、真理に基づく義と聖をもって、神にかたどり造り出された、新しい人を身に着るべきことです。」(エペソ 4:23~24)

●真理であるイエシュアによって、私たちが、神にかたどり造り出された、新しい人を着ること—それがイエシュアの教えたことだとパウロは述べています。この意味において、「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。」(Iテモテ 2:4)

「あなた(実際には愛弟子のテモテのこと)は、熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう努め励みなさい。」(IIテモテ 2:15)

●真理はある意味において、深く、自分を神にささげるよう努め励まなければ説き明かすことのできない内容を持っています。同時に、それは鋭い刃物のようなもので、真理は人を切ることでできる力を持っています。です

## אגרת שאול אל האפסים

から、パウロは真理を愛をもって語るようにとも勧めます。伝家の宝刀をむやみに振りかざすことなく、神の愛をもって語る必要があることを述べています。「むしろ、愛をもって真理を語り・・・」(エペソ 4:15)。

「反対する人たちを柔和な心で訓戒しなさい。もしかすると、神は彼らに悔い改めの心を与えて、真理を悟らせてくださるでしょう。」(Ⅱテモテ 2:25)

### むすび

●ところで、神の武具についてのパウロの最初の言及は、「真理の腰帯を締める」ということでした。このことが意味することがなにか、すでに答えは出ております。そうです。「真理の腰帯を締める」とは、キリストご自身にとどまり、キリストのことばの中にとどまり、キリストの愛の中にとどまることです。キリストのことばを私たちの心の中に豊かに住まわせ根付かせるということです。このことは、当教会ではいつも強調されていることです。それがエペソ人への手紙においては、「腰には真理の帯を締める」と表現されているのです。

●すでに、真理の腰帯は与えられ備えられています。大切なことは、その帯を自分の腰に「締めるかどうか」なのです。「人の禪(ふんどし)で相撲を取る」ということばがあります。自分のものを使わずに、人のもの、人の力を利用して利益を得ることのことわざですが、私たちクリスチャンは、まさに「イエシュアの禪で相撲を取る」者と言えます。与えられ、備えられている帯、禪はイエシュアのものであります。「ジーザスの禪で相撲を取る」ことを、使徒パウロの常套句で言うならば、「イン・クライスト」(In Christ)です。ギリシア語で言うならば「エン・クリストー」です。日本語では「キリストにあって」ということばです。単なる身代わりのキリストだけでは限界があります。「イン・クライスト」(In Christ)、これが戦いの勝敗を決めます。

●メシア・イエシュアこそ、アダムとエバによる罪の結果、封じられてきた「いのちの木に至る道」です。この真理を受け入れて、益々、キリストの中に深く根差していく必要があります。これが戦いにおける最初の身支度であり、大切な身構えなのです。そのためには、もっとキリストとかがかり、キリストのことばを聞き、私たちの心のうちに豊かに住まわせることが必要なのです。そしてそれができるためには、生活をもっとシンプルにして、多くの時間をキリストとともに過ごすことが求められます。具体的には、聖書を読み、神のことばを瞑想したり、学ぶ時間を作り出したりすることです。今までと同じような生活をしながら、果たして真理を腰帯びとして締めることができるでしょうか。「イン・クライスト」(In Christ)とは、自分の生活を変えていくチャレンジをしていく戦いでもあるのではないのでしょうか。

●私たちが悪魔の策略に立ち向かうことができるために、パウロが6章10節で言ったことばを、もう一度心に留めましょう。

「主にあって強められなさい。その大能の力によって強められなさい。」

***Be strong in Christ !! Be strong in His mighty power !!***